

も原先生は、先生宛に送られてきた最初の Draft から H. Hara をあえて訂正しなかったことを覚えている。今後学名の著者名は本書に従うのが適切である。(大場秀章)

□Sivarajan V. V. : **Introduction to the principles of plant taxonomy** Second edition. Edited by N. K. B. Robson. 292pp. 1991. Cambridge University Press, Cambridge. ペーパーバック £15.95 ハードカバー £40.

分類学の基礎を簡素に纏めた教科書である。この一冊があれば分類学の専門用語について、かなりの理解が得られるようよく工夫されている。本書の初版はインドの Calicut 大学の Sivarajan により 1984 年に出版された。この第 2 版もはじめは初版同様にニューデリーの Oxford & IBH から出版されたものである。

本書は、生物分類, taxonomy とその重要性, 目的などを述べた第 1 章はじめにから, エピローグまでの 10 の章からなる。原著者の Sivarajan の好みなのか, 記述はなかなかこってりしていて, 時に理屈が過ぎるくらいを感じた。全体を通覧して, 本書が Davis & Heywood の Principles of Angiosperm Taxonomy (1963) を基調としていると考えられた。一部に「古代インドの植物科学一瞥」のような部分もあるが, 全体を通してこれがインド産の教科書とは思えないほど, インド臭が少ない。それがゆえに汎用の教科書として取り上げられたともいえるが, 評者は熱帯圏に住む研究者らしい視点が著者に欠けていることを残念に思う。

この本では, 狭義の分類学に力点が置かれているが, しかし幅広く分類学全般の重要事項や概念の紹介も忘れてはいない。分子系統学や種生態学などでの共同研究をはじめとして, まますます窓口が広がりまた細分化が進む今日にあっては, これだけ広く分類学全般に通じることはなかなかむずかしい。その意味では一般読者のみならず研究者にとっても本書は座右に置く手ごろな教科書のひとつといえるだろう。(大場秀章)

□鮫島惇一郎: **北の森の植物たち** 300 pp. 1991.

朝日選書 429. 朝日新聞社 ¥1,200 (+送料)。

著者は, 北海道大学, 林業試験場北海道支場に勤務した。長年の研究テーマであるエンレイソウでは, 美しい図を伴う「エンレンソウ属植物」を出版された。

北海道の植物研究では宮部金吾先生の草創期の後を継いだ館脇操先生を抜かしてはその歴史を語れない。その館脇先生も多くのの人にとっては過去の学者となって久しい。ぼう大な論文や雑誌寄稿文を残されたその館脇先生に私淑され, 生涯を北海道の植物と森林研究に送られた著者の姿が思い浮かぶ。

本書は, 館脇先生が北方林業に連載した「汎針広混交林帯」を基礎にした北海道の森林についての解説から始まる。ここには, 先生自身の手になる「北欧雑記」から想像される先生とは別の, 日常の先生の側面が活写されている。

次の「エンレンソウ物語」では著者の研究が手際よくまとめられている。これを読んで, 私ははじめて森林とエンレンソウの研究が著者にとって一体のものであったことが理解できた。

続く第 3, 4 章は北海道に産する樹木や草本について, 著者の体験を混じえた随筆といえる。挿入された線画は生き生きとしている。コバコシャジンの正確な図はこれがはじめてだろう。どの植物をとっても興味深いが, キタコブシとエゾヤマザクラの関係のように考えさせられることも多い。北海道の植物に興味をもつ方だけでなく, 多くの読者に本書を推奨したい。(大場秀章)

□松沢篤郎・青木雅夫: **渡良瀬川支流山塊の植物シダ植物編** 158pp. 1992. 自費出版. ¥2,000 (送料込み)。

著者のひとり, 松沢さんはかつて東京大学へ内地留学され, 「渡良瀬川支流山塊植物誌」(1965) を出版された。今回, 若い協力者を得て本書をまとめられた。

首都圏に接する渡良瀬川支流山塊は林業を主な産業とする地域だが, 多くの野生植物がいまだよく残っている。基岩が露出しているなど全般に土壌層が浅いところが多い。この土地的条件を反映してかモンゴリナラ類似のナラがみられるなど植

物相の上からは興味深いところである。ヒメシャラなど、ここを北限とする種もある。

本書は上記の地域に産する162種のシダ植物について、特徴、採集地などを簡潔に記し、線画やシルエットで葉やその一部、孢子嚢などを図示した、「渡良瀬川支流山塊シダ植物誌」とでもいべき性格のものである。上記土地的条件とシダ植物相との関連は残念ながら議論されていない。

多数の図を伴う本書は、北関東を中心とした地域のシダ植物相へ関心を向けられる方々には格好の入門書ともなるであろう。(大場秀章)

□千葉県立中央博物館：ブナ林の自然誌 32pls. +136pp. 同館発行。1992。¥1,200+送料 ¥310。

特別展示の解説書とはいうものの、見事な図版と16章にわたる堂々たる論説集である。ブナの仲間：世界のブナ科、世界のブナとブナ林、日本のブナとブナ林、以下すべて頭に「ブナの」か「ブナ林」がつくので省略して、起源と進化、地史的成立過程、植物季節、一生、樹木、草木、蘚苔植物、藻類、地衣類、キノコ、哺乳類、音、保護と、新鮮多彩な陣容をほこる同館の作品らしい。大抵の章には参考文献が示されている。「音」という章は、この種の本では見慣れない項目だが、植物の生活環境の一要素として、今後の展開を期待したい。「藻」についても、常識的には樹皮にもついていることはわかるが、これも一つの環境として研究できると思う。ヒマラヤでは樹皮に着生したコケの間に、ミミカキグサ類がたくさんみられるが、これは捕捉の対象となるプランクトンがいることを意味するのだろう。このような研究主体の展示や解説は、長期的にみて拡大再生産性が高いが、準備もまた大変だったことだろう。客寄せ目当ての特別展とカラー写真ばかりきれいに並べた図録が多い昨今、敬意を表したい。購入についての連絡先は、千葉県立中央博物館ミュージアムショップ (TEL 043-265-3111 内線 308, FAX 043-266-2481), 送金先は千葉県立中央博物

館友の会 (東京 1-537050 または現金書留)。なお送料は2冊目以降は一部70円である。

(金井弘夫)

□八田洋章：箱根の樹木 284pp. 1992. 神奈川県新聞社かなしん出版。17×10.5cm. ¥980。

副題は「ツリーウォッチングの手引」とあり、序文を含めてはじめの30頁ほどが、着眼点についての図入りの説明となっている。本文は一頁に一種をあて、上半は植物の白黒写真、下半が解説である。著者は樹木の分枝や萌芽の様式について観察・研究を積み重ねており、そういう面からの観察の手引を意図したと思われるが、あまり効果をあげていない。第一は紙質の関係からか、写真が鮮明でないことである。最近美しい原色写真の図鑑が食傷気味に出回っているから、これをカラーに取り替えても代わり映えするとは思われない。第二は、記述の部分には著者独自の観察点の指摘が豊富になされているのだが、文章のみなので、よほど気をつけて熟読しないと気付かれないだろうことである。たとえばヤマグルマの枝の傾きと葉の大きさの関係などは、そのつもりになって見てはじめて、そういう現象があることがわかるだろう。第三は最初の「手引」の部分が詰め込みすぎで、読みづらいことである。ここを辛抱して読む者は少ないだろう。植物の写真を簡潔な線画に代え、記述された観察点が重複をかまわず一々図解してあれば、少なくとも読者の知っている植物については著者の意図が伝わって、観察力を深める助けになるものと思う。そうすれば先頭の教科書的な総合解説を、この種の本でやる必要はないだろう。図鑑というと、名前を調べる→名前の由来→利用・万葉植物、という行き方が常套で、出版社もそういう常識から外れた本は敬遠する気配がある。折角の著者の蘊蓄が、みんなに伝わるような企画を立ててもらいたいものだ。

(金井弘夫)